

# 孝標女と宮仕え

## 一、二、三の問題点をめぐって

樊 穎

藤原定家筆、御物本『更級日記』奥書には「常陸守菅原孝標の女の日記なり、傳の殿の母上の姪なり、夜半の寢覚、御津の浜松、みづからくゆる、あさくらなどは、この日記の人のつくられたるとぞ」と書かれており、孝標女が物語作者でもあったことが示唆されている。このことについては、多くの研究者によって論じ続けられ、それを支持するのが現在ではほぼ定説となっているが、個々の物語の作者を彼女とする確証がないため、いまだに断定できない。物語作者としての孝標女を考えるには、彼女と先行物語、特に『源氏物語』との関係を考える必要がある。孝標女は『源氏物語』の早い時期の読者として、こなれた読みにもとづいて日記の中に『源氏物語』を多岐にわたって引用し、『源氏物語』についての理解と教養の高さを示した<sup>20</sup>。また、紫式部と同じく漢学者の娘であり、宮仕えの経験を持つ女房であることから、書く女としての紫式部に対して、孝標女は特別な意識を抱いていたようである。彼女の物語創作は、『源氏物語』からの影響と紫式部へのそうした意識にねざすと言われている<sup>21</sup>。さらに、孝標女とその作品について、個人の立場と人生を越え、ジャンルを越え、共有する知識と感性を持つ文化人の世界において捉え

るべきであるとの指摘もある<sup>22</sup>。孝標女が生きた時代に、藤原道長からその子頼通へと受け継がれた貴族社会の栄華がその絶頂に達し、その後次第に衰退していく。しかし、頼通はただ父道長の影の中にあるばかりではなかった。文化に対する彼の情熱、指導力、求心力の強さが改めて評価され、頼通が中心となる文化圏の一員としての孝標女およびその作品を位置づけるべきであるという認識が強まってきた<sup>23</sup>。

一方、永承七（一〇五二）年、末法の世が到来したことも見落とせない。絶望感と虚脱感が貴族社会に広がり、文芸にも大きく影響していた。『更級日記』も当時の時代背景と孝標女を取り囲む文化圏の特徴を反映していると言えよう。以下では『更級日記』の宮仕えの記事を中心に、孝標女がどのようにその時代背景を受け止め、頼通の文化世界とどのようななかわりを持ち、その一員として執筆活動をしていたかを考えてみたい。

## 二

『更級日記』が成立する時期は、康平元（一〇五八）年九月二十五日に夫橘俊通がなくなってもまもない頃であると考えられる。それは、ちょうど藤原頼通が政治的立場においても、文化への関与の面においても、その存在が大きく変わった時期であり、いわゆる「頼通的世界」と称される時代である。その歴史背景については、すでに先学たちによって詳細にまとめられているが、孝標女の宮仕えについて考えるときの前提となっているので、ここで簡単にまとめておこう。

後一条朝寛仁元（一〇一七）年三月十六日、頼通は父道長から摂政を

譲られ、その翌々年寛仁三（一〇一九）年十二月二十二日に関白となった。万寿四（一〇二七）年十二月四日、道長が世を去った。以来、後一條朝の後半から、後朱雀、後冷泉の三代に亘って、関白頼通の専権時代が続いた。頼通自身は和歌も詠み、勅撰集『後拾遺集』以下十六首人集している。そのほか、和琴や笙もでき、漢詩も詠んでおり、文芸全般に興味を示している<sup>7</sup>。万寿年間以降、頼通は積極的に詩会・歌会を開催し、長元年間（一〇二八～一〇三六）から長久年間（一〇四〇～一〇四三）にかけて、その頂点を迎えた。能因、源経信や和歌六人党などの男性歌人はそこに頻繁に出入りしていた。また、後宮には、頼通女で皇后の四条宮寛子、頼通の養女で後朱雀妃姫子腹の祐子内親王と六条斎院祿子の三サロンがあり、頼通はその後見役として頻繁に歌合や物語合を主催した。そこで伊勢大輔、相模、四条宮下野、一宮紀伊、出羽弁などの女性歌人が活躍していた。さらに、それらの後宮サロンには、『源氏物語』の伝統を受ける『狭衣物語』『御津の浜松』『夜半の寢覚』などの長・中編物語や、『逢坂越えぬ権中納言』をはじめとするおびただしい散逸短編物語が生まれた。

一條朝の文化サロンが持つ「対立をはらんだ緊張や優雅にひそむ真剣さ」と違って、頼通専制時代の後宮サロンは、平安後期の成熟期の文化世界の隆盛を反映している一方、「一切の対立が統合される」「はりがなく平静かつ平凡なサロン」といわれてきた。『源氏物語』以来、それと等しき大きな影響力を持つ作品と作者が現れていなかったことが、その理由の一つであろう。また、後宮に仕える女房たちは、ほとんど孝標女と同じように、『源氏物語』を読んで育った世代であり、『源氏物語』をはじめとする文芸への享受と理解を、相当なレベルで共有・共感して

いることもあげられよう。さらに、それらの後宮サロンは、ともに頼通の後見役としていたので、頼通の目指している文化世界の一部として、彼の下で統一されていることも指摘されている。

頼通の下で統一された平穏太平な後宮サロンの一つ、祐子内親王の後宮サロンに、孝標女は出仕していた。彼女の出仕のタイミングときっかけについては、頼通の後宮政策と関係があると考えられる。後一條天皇が九歳で即位し、三十歳で崩御するまで、外祖父道長、伯父頼通の二代の関白の後見を受けていたのと違い、後朱雀天皇は、即位したときにすでに二十八歳で、周囲の状況を冷静に見極める観察能力と自分の意志で判断する習慣を持つ大人になってからの天皇即位であった。そんな後朱雀天皇に対していささか警戒心を抱いているからであろうか、頼通は撰関家の権力を誇示し、終始威圧的な姿勢で臨んでいた。そして、天皇の外戚として長く政権の中心にあると、後宮政策にも積極的に取り組んでいた。その一環として、頼通は養女姫子を後朱雀天皇の後宮に入れた。しかし、長暦二（一〇三八）年四月一日に、第一子の祐子内親王を出産し、翌長暦三（一〇三九）年八月十九日に、第二子の祿子内親王を出産して、姫子はまもなく崩じたのである。頼通の妻の娘寛子がまだ幼く、後朱雀天皇の後宮に入内できる年齢ではないため、頼通の後宮政策が行き詰まった。そんな頼通にとって、姫子が残した二人の内親王は、後朱雀天皇との関係を取り持ち、皇族との連携を強化する重要な存在となっていたはずであろう。とくに祐子内親王が初孫でもあるため、祿子内親王とは異なる思いを、頼通は抱いているだろうと考えられる<sup>10</sup>。実際に、祐子内親王の家司に正四位下藏人頭藤原資房が就任し、頼通は直接後見役を務めたのに対し、祿子内親王の家司には、具平親王の皇子で頼

通室隆姫の弟、頼通の猶子である正二位大納言源師房が就任していたため、頼通の代わりに、祿子内親王の実後の後見役を務めたのではないかと推測できよう<sup>1)</sup>。また、多くの先行研究に言及される『春記』長久元年十一月二十三日条からも、頼通のその気持ちの一斑がうかがえる。それによると、祐子内親王が二歳のとき、着袴の儀を行い、頼通の強引な奏上で祐子内親王に准后の勅許が下されたという。内親王の養育のために、頼通は才能ある女房を集め、サロンの形成と充実を図ろうとした。特に祐子内親王の後宮サロンは、頼通が直接後見役を務めていたため、彼の目指した文芸的志向性に沿って、頼通の文化世界の一環として構成された。

頼通の後宮政策と文芸的志向性によって形成された祐子内親王の後宮サロンには、数多くの女房が集められ、その中に菅原孝標女もいた。孝標女は『新古今集』以下勅撰集に十四首入集するほどの歌才があり、物語作家としても伝えられている。彼女の出仕には必然性があり、当時の後宮サロンの文化活動を担う一員として、頼通の文化世界で活躍していたと考えられる。

### 三

『更級日記』の中で孝標女の初出仕の前後の状況についてこう書かれている。

十月になりて、京にうつろふ。母、尼になりて、同じ家の内なれど、方ごとにすみはなれてあり。父は、ただわれをおとなにしすゑて、われは世に

も出で交らはず、かげに隠れたらむやうにてゐたるを見るも、頼もしげなく心ほそくおぼゆるに、聞こしめすゆかりある所に、「なにとなくつれづれに心ほそくてあらむよりは」と召すを、古代の親は、宮仕へ人はいと憂きことなりと思ひて、過ぐさするを、「今の世の人は、さのみこそは出でたて。さてもおのづからよきためしもあり。さてもこころみよ」と言ふ人々ありて、しぶしぶに出だしたてらる。

父孝標が任地の常陸から戻り、一家が西山でしばらく家族の団欒を味わった上で帰京、それからまもなくのことである。何かのきっかけで孝標女のことを聞き及んだ縁故ある邸からの突然の要請だったようである。孝標が常陸から戻ったのは長元九年（長暦元年 一〇三六）であり、出仕の要請は、その翌年の長暦二（一〇三七）年か長暦三（一〇三八）年のことと推測でき、祐子内親王が生まれた後のことであろう。その「ゆかりある所」とは、幼い祐子内親王が頼通に引き取られたあと暮らしている頼通邸高倉殿であると指摘されている。祐子内親王が生まれた後、後宮サロンのことを計画している頼通から、孝標女の出仕を要請したと考えて間違いないだろう。

しかし、孝標女は宮仕え以前の生活を、「さこそ物語にのみ心を入れて、それを見るよりほかに、行き通ふ類親族などだにことになく、古代の親どものかげばかりにて、月をも花をも見るよりほかのことはなきならひに」と記した。孝標女は、古風で早くも政界から引退した父親と、すでに尼になった母親の元で、月や花を眺めながら物語の世界に浸り、親戚などとの関わりもなく、ひっそりと暮らしていたようである。このような隠居のような生活であれば、一介の受領の娘である孝標女のこと、時の関白頼通の

耳まで届いたはずはない。では、孝標女の出仕のきっかけとなることは一体何であろうか。

多くの研究者により、さまざまな仮説が立てられた。まず、孝標像への再検討から、父孝標の關係で出仕のチャンスを得たのではないかと考えられている。文章生出身の孝標は、若いときに、一条天皇や道長が臨席する作文会で詩序を献ずるなど、文才を披露した。能吏としての活躍もあったものの<sup>12</sup>、三条天皇がまだ東宮であった時代から東宮の藏人であったためか、道長の外戚としての力が強化されていくなか、任官は不如意の連続であった。そして、『扶桑略記』治安三（一〇二三）年十月十九日の条により、孝標は吉野の龍門寺の方丈の室の両扉にあった菅原道真と都良香の真跡のそばに、「仮手之文」を書き付け、道長の顰蹙を買ったという。一方、上総と常陸などの地方官に就任し莫大な財産を蓄積した<sup>13</sup>という日記の中に記されていない一面も持っている。当時、父親から息子に官位などを譲ることもあるから、孝標も早く政治の舞台から退き、息子の定義を支える役として、自分のなれなかつた文章博士に息子の定義が補任されるまで後押ししたのである。孝標と息子定義の努力で、家の学統が守られ、それゆえ漢学者の彼の娘に宮仕えの打診が来たのであろう。

また、孝標女の宮仕えについては夫橘俊通一族との關係も指摘されている。橘俊通の父為義は、文章生の出身で漢詩も和歌もよく詠んでおり、孝標が東宮の藏人として昇殿が許されたときに、為義も同じ時期に昇殿が許されていた。二人は職場の仲間であり、交流があったと推測できる。一方、為義は一条天皇皇后定子腹の敦康親王の家司であり、親王の面倒を見ている彰子や道長に仕えている紫式部とその父為時とも交流

があったと考えられる。敦康親王は、頼通の養女となった姫子の実父に当たり、祐子内親王の実外祖父である。このように、橘俊通一族の皇族や摂関家の道長と頼通とのつながりは注目すべきである。ただし、津本信博の調査によると、為義は寛仁元（一〇一七）年十月二十九日に亡くなったことがわかり、その時、俊通はまだ十六歳であった<sup>14</sup>。後見役の父が亡くなり、俊通は将来の道を広げるために、父のさまざまなつながりと積極的に關係を保ちつづけていたのであろう。それから二十年後、祐子内親王の家に女房が必要となったとき、この情報をいち早く入手し、その候補にふさわしいと思われる孝標家に要請したのであろう。出仕のことをきっかけに、俊通と孝標女は急接近し、その翌年（長久元年一〇四〇）に結婚したとも考えられる。

孝標女が結婚後も宮仕えが続けられたのは、夫俊通の協力やその一族との關係がないととても不可能であろう。「宮仕えは経費もかかり、しかるべき後見があつてこそ成立する側面がある。いわば社会に進出するようなものだから、招婿婚とはいえ、夫の理解、協力は不可欠だったのであろう」と、福家俊幸は指摘した<sup>15</sup>。結婚後、夫俊通が父孝標に代わつて孝標女の後見となり、彼女の宮仕えを支えていた。孝標女も、父の任官に対する期待から次第に夫の任官に対する期待へと変わっていった。

そのほか、少女期の孝標女に多大な影響を与えた継母上総大輔が、孝標女の出仕に關係している可能性があることも指摘されている。『尊卑分脈』によると、上総大輔は高階家の出身で、高階成行の娘であり、物語を好み、歌を詠み、『後拾遺集』の歌人でもある。上総大輔は、孝標とともに上総に下る前に、すでに宮仕えの経験があつた。その際に女房たちとの交流を通して触れた、或いは読んだ『源氏物語』をはじめとす

る多くの物語を、上総での寂しい田舎暮らしのつれづれに、孝標女姉妹に語り聞かせ、孝標女に物語創作に関する開眼の機会を与えた。上総から京に戻ってまもなく、彼女は孝標と別れ、再び宮仕えに復帰し、後一条天皇の中宮、道長の四女、頼通の妹威子のところに仕えていた。長元九（一〇三六）年九月六日、後一条天皇のあとを追うように、元中宮威子が崩じたときまで、約十五年間も仕えていた。その後の彼女の消息ははっきりと分らないが、すぐさま主家やそこに仕えている女房たちとの関係を絶つわけではないだろう。

本保洋次郎は、『後拾遺和歌集』『今鏡』と『尊卑分脈』『勅撰作者部類』の記述を見比べて、元中宮威子に仕えた女房と後朱雀院の中宮姫子に仕えた女房とが、歌のやり取りなどをして親交があったらしいことに注目した<sup>16</sup>。姫子の崩御後、そのまま祐子内親王の女房として仕えていた女房もいるという。すなわち、上総大輔やその同僚たちは、親しんでいた姫子付きの女房たちが新たに祐子内親王に仕え始めてからも、互いの交流を続け、情報を交換していたといえよう。祐子内親王家に女房を募集しているという情報も、親しい女房同士の間で広がり、上総大輔の耳に入ったであろう。

上総大輔の親族の中でも、出仕経験のある人がいる。彼女の父成行の弟高階成章は、紫式部の娘大式三位を妻に持っている。また、父成行の従兄弟高階成順の妻に、摂関家後期の代表的な歌人である伊勢大輔がいる。伊勢大輔とその二人の娘筑前（康資王母）と筑前乳母は、ともに出生しており、歌人としても活躍していた。高階家の親族の間で、何かの機会があつて、上総大輔から孝標女のことを聞き、主家に伝えた可能性もあるだろう。

頼通の文化世界を構成した三大サロンに出仕している女房たちは、次の二つの特徴があると、和田律子は指摘した<sup>17</sup>。一つは、「父兄または一族の男性が主家と密接な主従関係にある縁で出仕した女房が多い」ということであり、もう一つは、「母娘、姉妹、伯叔母姪といった血縁につながったひとびとが揃って出仕し」、特に「母の存在が大きかった」という。たとえば、母娘の場合は、伊勢大輔と康資王母筑前乳母姉妹、赤染衛門と江侍従、弁内侍と小少将、小弁と紀伊、出羽弁と美作、紫式部と大式三位などが挙げられている。姉妹の場合は、康資王母と筑前乳母、美濃と六条斎院宣旨が挙げられ、伯叔母姪あるいは従姉妹関係では、五節と但馬、伊賀少将と少将君、相模と美濃宣旨姉妹が挙げられている。

上総大輔は、上総で約四年間継子の孝標女姉妹と暮らし、実子同様にかわいがっていた。彼女は、孝標女の文学に対する関心、感性和才能をもっとも身近で感じていた最初の人と言つてもよいだろう。上総大輔は、耳に入ってきた祐子内親王家の女房募集のことを、孝標女の文学的才能を生かす好機として、宮仕えをしている親族や親しい同僚をつつに、孝標女のことを推薦したのである。孝標女の「古代の親」を説得したときの、「今の世の人は、さのみこそは出でたて。さてもおのづからよきためしもあり。さてもこころみよ」ということばも、上総大輔が宮仕えの経験があつたからこそその発言であり、親族に大式三位や伊勢大輔とその娘たちなどのような宮仕えの成功例があつたからこそその発言である。

## 四

孝標女は長暦三(一〇三九)年に初出仕し、その後十数年にわたって宮仕えを続けた。その間、孝標女は結婚し、宮仕えの立場や宮仕えに対する認識も大きく変わっていた。それらの変遷は、彼女の物語執筆にも影響を与えたと考えられる。『更級日記』の執筆時期は、孝標女の夫の死後二、三年の間であろうと考えられ、彼女の筆であろうと伝えられる「夜半の寢覚、御津の浜松」の推定創作時期は、『更級日記』の成立より更に後のことであろうと、これまで考えられてきた。しかし、そう断定したい不審な点もいくつか残っている。以下では、孝標女の宮仕えの記事を中心に、彼女の宮仕えと物語執筆の状況を検討してみたい。

出仕の要請が来たとき、「古代の親は、宮仕へ人はいと憂きことなりと思ひて、過ぐさするを」と、両親は宮仕えに反対する態度を示した。それに対して、「今の世の人は、さのみこそは出でたて。さてもおのづからよきためしもあり。さてもこころみよ」といって、孝標夫妻を説得する人がいた。

「今の世」とは、道長の影響から独立し、政治においても権勢を極め、文芸においても独自の世界を構築していく頼通の時代を指している。摂関家の人々が競って娘を入内させるのと同じように、受領などの中下流貴族たちも、何とかして娘を摂関家に宮仕えさせ、摂関家と関係を取り持とうとしている。「さてもおのづからよきためしもあり」とは、当時の人たちが誰もが知っている紫式部とその娘で後の後冷泉天皇の乳母となった大式三位、伊勢大輔とその娘たちなどのことを指しているのであろう。孝標女の夫橘俊通の親族にも一条天皇の乳母となった橘三位徳子

がおり、後一条天皇の乳母となった従三位の歌人豊子もいる<sup>18</sup>。彼女たちは、宮仕えの女房たちが夢見る「よきためし」であるといえよう。

孝標夫妻は説得され、しぶしぶ孝標女の宮仕えを許した。初出仕の夜、孝標女は、「立ち出づるほどのこち、<sup>a</sup> あれかにもあらず、<sup>b</sup> うつつともおぼえて、<sup>c</sup> 暁にはまかでぬ」。宮仕えの生活については、「<sup>c</sup> 里びたるこちには、なかなか、定まりたらむ里住みよりは、をかしきことも見聞きて、心もなぐさみやせむと思ふをりありしを」、また一方では、「いとほしたなく、悲しかるべきことにこそあべかめれ」と思っていたようであり、宮仕えにうまく馴染まない様子であった。

新潮日本古典集成『更級日記』の頭注<sup>19</sup>には、『枕草子』の初出仕の部分に使われている心情表現が挙げられている。『枕草子』第一七七段「宮にはじめてまゐりたるころ」には、それぞれ次のような表現が使われている。

- 『更級日記』
- a あれかにもあらず      『枕草子』  
あれにもあらぬ心地すれど、(まゐるぞいと苦しき)
- b うつつともおぼえて、      うつつにはまだ知らぬを、夢の心地ぞする
- c 里びたるこちには      見知らぬ里人心地には

『更級日記』と比較すると、初出仕の記事において、心情表現が似ていることがわかる。同じ箇所で新日本古典文学大系『更級日記』の注には、特に『枕草子』の表現を取り上げられていない。ほかの注釈書も、

清少納言、紫式部、孝標女の三人の宮仕えに対する違う意識や立場の比較を言及するものは多いが、表現の相似性については触れられていない。これらの表現は、必ずしも『枕草子』の特有の用語とはいえない。これをもつて、『更級日記』と『枕草子』との関連性を説明するのは難しいが、孝標女が『枕草子』を読んだ可能性があるかどうかを探るとき一つの手がかりになる。

道長時代、彰子のライバルである定子に仕えていた清少納言が書いた『枕草子』は、広く人目に触れることが少なかっただろうが、頼通の時代になると、定子後宮およびその一族に対する時代環境が少し変わった。前に述べたように、道長の死後、定子一族の面倒を見ていたのは、彰子と頼通である。定子腹の敦康親王は、頼通の養女となった姫子の実父に当たり、祐子内親王の実外祖父である。つまり、祐子内親王は定子の曾孫皇女である。また、『枕草子』の流布状況について、もつとも可能性が高いと言われているのは、定子没後に、清少納言が執筆を継続し、定子への思いをその第一皇女脩子内親王に向けていただろう。定子の許にあった『枕草子』と、定子没後書かれた章段が、脩子内親王の身邊に合体したという推定である<sup>20</sup>。この一族の関係者の間で、そして、宮仕えの女房の間で、『枕草子』が読まれ、語り継がれていた。孝標女も祐子内親王のサロンに出仕することをきっかけに、『枕草子』を読むチャンスを得たと推測できよう。

出仕してしばらく、孝標女は結婚によって家に籠りがちの生活をしてきたが、再び祐子内親王家から出仕が求められ、時々出仕するようになった。そのときの心情の変化と宮仕えの実態について、孝標女は次のように綴った。

たえずに召しなどするなかにも、わざと召して、「若い人参らせよ」と仰せらるれば、えさらず出だし立つるにひかされて、また時々出で立てど、過ぎにし方のやうなるあいなのだの心の心おごりをだにすべきやうもなく、さすがに、若い人にひかれて、をりをりさし出づるにも、馴れたる人は、こよなくにごとにつけてもありつき顔に、われはいと若人にあるべきにあらず、またおとなにせらるべきおほえもなく、時々まらうとにさし放たれて、すずるなるやうなれど、ひとへにそなた一つを頼むべきならねば、われよりまさる人あるもうらやましくもあらず、なかなか心やすくおぼえて、さんべきをりふし参りて、つれづれなるさんべき人と物語などして、めでたきことも、をかしくおもしろきををりも、わが身はかやうにたちまじり、いたく人にも見知られむにも、はばかりあんべければ、ただ大方のことのみ聞きつつ過ぐすに、

『紫式部日記』のような女房批評まではいかないものの、孝標女は、女房を「馴れたる人」「若人」「おとな」「われよりまさる人」に分け、さまざまな出仕の位相を示している。その中で、自宅に籠りがちな自分に対して、主家から、上臈の女房のようにすべてを任せるわけにはいかないという思惑があると感じつつ、孝標女は自分を「まらうと」の立場であると認識している。「時々まらうと」として、「さんべきをりふし参りて」、主家に関する晴れ舞台に出るのを遠慮しつつ、「つれづれなるさんべき人と物語などして」、「なかなか心やすく」思っているようである。

長期間ではなく、主家の行事に合わせて、短期的に主家に上がり仕える女房は、孝標女だけではなく、当時ではさほど珍しくない。しかし、

長久二（一〇四一）年、孝標女が宮仕えを始めて一年余りのとき、その年の春から夏にかけて、後朱雀天皇時代の各後宮サロンで四回も歌合が開催され、実質的に歌合が最も盛んだった時期ともいえようが、これらの歌合の記録の中に孝標女が出席した痕跡が見つからない。それを以て、かつて孝標女の文芸的な資質が低いとの見方も提示されていた<sup>21</sup>。しかし、当時頻繁に開かれた歌合は、一部を除いて私的の歌合が多いことが指摘されており、記録に残された参加者の女房も、出仕している家の歌合だけに参加する者が多く、毎回ではなく、一回だけの参加者もいる。和田律子は歌合に参加した女房について、次のように指摘した。

歌合に参加した女房の多くは、いわゆる「いへの女房」として、歌合開催当時その家に仕えていた人々で、彼女たちは晴儀歌合のような公的の歌合には参加できなかつたらしいことが推測される。つまり、当時の歌合参加女房の大部分は、その周辺では和歌の巧者であつたかもしれないが、勅撰集入集状況、歌集の有無、歌人としての知名度や力量はさほど高くない人々であつたらしいということである。

また、孝標女の歌合への不参加についても、「歌合参加女房だけが文芸的資質に恵まれた人であるとはいえないであろう」、「孝標女の歌合不参加が事実であつたとしても、それがすなわち孝標女の文芸的資質の有無を判断する理由とはならないのではないか」<sup>22</sup>と提唱した。そもそも、当時の数多くの公的・私的の歌合に、何らかの機会を得て参加し、作られた夥しい歌の中で自分の歌を記録に残せる人は、ごく少数の人だけであつた。「舞台裏」で何らかの形でかわり「表舞台」を支えている人は、

もつと大勢いたはずである。「時々まらう」として出仕している孝標女が、歌合に参加する機会があつたかどうかの事実ははっきりしていないが、十数年も宮仕えが続いたことから、それなりに周囲から女房としての優秀さと文芸的な資質が認められていたと考えられる。歌合の記録に残つた女房だけではなく、活躍が記録されていない孝標女のような女房たちも、撰閣政治後半の文芸世界の隆盛を支えていたといえよう。

孝標女の物語創作については、『更級日記』完成後になされたこの見方もあるが、それに対して、筆者はいくつかの疑問を抱いている。一つは、『更級日記』完成時、孝標女の推定年齢は少なくとも五十三歳である。晩年に入って家族とも別居しており、孤独と病に悩まされている様子が『更級日記』にて確認できる。物語の作成はそれなりの経済基盤が必要であるが、夫の死後、そのような健康状態と体力で、孝標女は誰の後盾にして、物語の創作に集中できたのだろうか。もう一つは、『更級日記』の記事を忠実に辿ると、人生の終焉を予期し、物語に夢中になつた若い時の日々を悔い、阿弥陀仏の来迎を唯一の救いとしている心境が書かれている。もちろん、『更級日記』に描かれた孝標女の人生は、彼女の実人生と同一のものとは考えられないが、現実を相当に映していると考えらるべきであろう。物語の世界や現世に完全に諦観を示した日記執筆の後に、物語の創作に没頭することは考えがたい。

とすれば、孝標女の物語創作は、もつと早い時期から始まっていたのではないかと思われる。たくさんのお話を耽読した孝標女は、徐々に他人が書いたものを読むだけでは満足を得られなくなり、自分の好きなように物語の結末やストーリーを書き換えたりすることから、物語の創作を始めたのであろう。遠い東国での生活、上洛の旅、継母との生別、乳

母や姉との死別などの経験が、彼女の物語作りの素材となっている。物語作者として励んでいた彼女のことが、関白頼通の耳に入ったことから宮仕えの要請が来た。結婚をし、宮仕えも始めた孝標女は、物語創作にますます励むようになった。彼女が時々「まらうと」として出仕することとは、宮廷生活を見聞し、ほかの女房と交流するきっかけにもなって物語創作により刺激を与えたにちがいない。

当時の後宮サロンの女房たちは、活発に文芸活動を行った。和歌や物語を次々に発表し、仲間の創作活動に敏感に反応し、互いによく読み、それらを自作に取り込み、あるいは真似て、新しい作品を次々と生み出していったようである。特に、物語は、物語合の開催を意識し、その日に合わせて書き下ろした短編のものが少なくないと、神野藤昭夫は論文の中で指摘している<sup>23</sup>。

「まらうと」と自己規定した孝標女は、主家から「さし放たれ」というより、むしろ自分から身を引き、少し距離を置くようにしているとも考えられる。当時の文芸の流行に追従することなく、物語合を意識して物語を書くより、孝標女はより自由な立場で自分自身が求めている理想的な物語を書こうとする信念を貫いたのではなからうか。

五

『更級日記』の宮仕えの記事を中心に、孝標女の藤原頼通を中心とした文化世界とのかかわりと彼女の歌人・物語作者としての活動を見てきたが、確証を得たものが限られており、不十分なところが多々ある。清少納言、紫式部、孝標女の三人の宮仕えに対する異なる意識や立場の比

較も重要な課題の一つであり、今後さらに考察を深めることにしたい。

- 1 『更級日記』の引用は秋山虔校注『更級日記』（新潮日本古典集成一九八〇年）による。
- 2 三角洋一「孝標女とことば」（『ミメーシス』六号 一九七五年十二月）、前掲秋山虔校注『更級日記』「解説」、犬養廉校注「新編日本古典文学全集『更級日記』「解説」「頭注」（小学館 一九九四年）、西田友美「更級日記の表現と方法——源氏物語引用をめぐって」（『国語と国文学』一九九四年十月）。
- 3 福家俊幸「『更級日記』と物語創作——記されない意味」（和田律子・久下裕利編『更級日記の新研究——孝標女の世界を考える』新典社 二〇〇五年）。
- 4 神野藤昭夫「散逸した物語世界と物語史」（若草書房 一九九八年）。
- 5 稲賀敬二「源氏物語の研究——物語流通機構論」（笠間書院 一九九三年）、和田律子「藤原頼通の文化世界と更級日記」（新典社 二〇〇八年）。
- 6 「頼通的世界」とは、文学史の中で用いられる用語である。広く用いられるようになったのは、犬養廉が「和歌六人党に関する試論——平安朝文壇史の一齣として」（『国語と国文学』第三十三卷九号、一九五六年九月）、「撰関時代後期の文学潮流——後冷泉朝文壇への照明」（『国文学 解釈と鑑賞』第二十八巻一号 一九六三年一月）の二つの論文の中で、独立した文芸概念として示してからである。
- 7 前掲五和田律子著書、第一部第二章第一節 表I「頼通の詩会参加・主催状況」（六十四ページ）を参照。
- 8 野口元大「後冷泉朝文学の位相」（『国文学 解釈と教材の研究』一九七五年六月）。
- 9 久松潜一（責任編集）『日本文学史』（増補新版）中古（至文堂 一九七七年）。
- 10 前掲五和田律子著書、第四章「文化世界確立の構想——祐子内親王家サロ

- ンの形成」を参考。
- 11 前掲五和田律子著書。
- 12 池田利夫「菅原孝標像の再検討——更級日記との関連に於いて」(『国語と国文学』一九七八年七月)。
- 13 角田文衛「菅原孝標の邸宅」(『王朝の映像——平安時代史の研究』東京堂出版 一九七〇年)、津本信博「更級日記の研究」(早稲田大学出版部 一九八二年)。孝標の能吏としての活躍は、彼の上司で蔵人頭であった藤原行成の日記『権記』(二十三箇所)や『小右記』『日本紀略』などで確認できる。
- 14 同前掲十三津本信博著書。
- 15 福家俊幸「『更級日記』における夫俊通の描かれ方についての一試論——不在化の意味」(『源氏物語と平安文学』第二集 早稲田大学出版部 一九九一年)。
- 16 本保洋次郎「菅原孝標女の仕出に關する一考察——継母上総大輔に着目して」(『古代中世国文学』第十一号 広島平安文学研究会 一九九八年四月)。
- 17 前掲五和田律子著書。
- 18 同前掲十三津本信博著書。
- 19 新潮日本古典集成の頭注には、『枕草子』に關連する事項が全部で十五箇所挙げられている。表現面において似ているかどうかは言及されていないが、筆者は宮仕えの部分において、表現上の相似点があると考えている。
- 20 渡辺実「新日本古典文学大系『枕草子』「解説」」(岩波書店 一九九一年)。
- 21 かつて『更級日記』の文学的な価値および孝標女の文学的な素養について、否定的な意見も提唱されたが、現在では肯定的な意見が定着している。阿部秋生はかつて論文「平安女流日記研究の問題点とその整理・更級日記」(『国文学 解釈と鑑賞』一九六一年二月)の中で、このように述べた。  
「……さらさらと書いてはいるが、自分の立場を客観化して、論理的に明確化することなどは、考えてみたことのない人ではあるまいか。……極言すれば、考えることの不得手な女性の甚だ素直な回顧録の文章なのだ、と思
- 22 前掲五和田律子著書。
- 23 神野藤昭夫「散逸物語『岩垣沼の中将』の復原とその物語史的位相——六条斎院物語合考断章」(『源氏物語と平安文学』第三集 早稲田大学出版部 一九九三年)。
- 24 中村文「孝標女の変容——『更級日記』再出仕記事を読み直す」(和田律子・久下裕利編『更級日記の新研究——孝標女の世界を考える』 新典社 二〇〇五年)。
- (はん えい・本学語学教育センター講師「非」)